

AINO & ALVAR AALTO SHARED VISIONS

アイノとアルヴァ ふたりのアアルト



1894年、ヘルシンキに生まれる。父のユホ・マンデルリンは、鉄道会社の職員。母ヨハンナとの間には13人の子どもが生まれた。労働者階級で裕福ではなかったが、自由な精神を持つ楽しい家庭で両親とも真面目に働いた。1888年、ヘルシンキでは珍しかった、水道や調理用レンジを備えたキッチンのある集合住宅へ転居する。

両親は教育熱心で子ども全員を学校へ行かせた。アイノは、ヘルシンキ・フィンランド女子学校で学んだ後、1913年ヘルシンキ工科大学の建築学科に入学する。大学在学中にアルヴァ・アアルトと出会う。当時は、女性が建築家として活動するのは簡単ではなく、アイノと同時代の女性建築家たちは、インテリアや家具デザインの方向へ力を入れた。1919年、女性建築家の協会、ツムストックン協会が設立されると、アイノもその一員となる。

1924年に、ユヴァスキュラに設立されたアアルト事務所にアシスタントとして勤務し始め、同年10月6日にアルヴァと結婚する。1925年に娘ヨハンナ、1928年に息子ハミルカルが生まれる。

1933年、ミラノ・トリエンナーレにおいて、パイミオのサナトリウムの家具が国際的に称賛され、アイノとアルヴァは世界に活躍の場を広げていく。アイノはアアルト事務所のほとんど全てのプロジェクトにわり、外部・内部の標準ディテールをはじめ、主要なインテリア部分とランドスケープに関わっていた。アイノとアルヴァは最大限に一緒に働き、彼らの仕事は完全に平等であり、対等であった。アイノは社会的意識が高く、労働者向け住宅や、子ども福祉施設、病院など、社会福祉に関わる仕事も熱心に取り組んだ。

ガラス器

1932年、カルフラ=イッタラ・ガラス器製造が主催するデザインコンペティションの型押しガラス部門において、ガラス器のボルゲブリック(スウェーデン語で水紋という意味をもつ)シリーズが2等に入賞する。この作品はその後、1936年、ミラノ・トリエンナーレにおいて、ゴールド・メダルを受賞している。ガラスは小さな子どもが使っても手から滑り落ちないようにするため、波型のディテールが施され、スタッキングも出来る。機能的でシンプルなデザインはアイノの得意とするところであった。他にも重ねると花のような形が特徴的なガラス皿、「リーヒメーエン・クッカ(リーヒマキの花)」、1939年ニューヨーク万博フィンランド館のためにデザインしたガラス器「アーロン・クッカ(アアルトの花)」は、アルヴァと共同でデザインした。

家具、テキスタイルのデザイン

1935年、アルヴァらとともに、家具の製造・販売を行うアルテックを設立する。アイノは、アルテックの初代アートディレクターとしてインテリアデザインに集中する機会を得た。アイノは、アルヴァと共に、フィンランドの環境特性に基づきつつ、モダニズムの思想を踏襲し、人が触れる部分には木材を使用するなど、誰もが使いやすく、機能的で量産出来るデザインを追究した。また家具をデザインすると同時にテキスタイルのデザインも多く手掛けた。

1946年、癌であると診断される。1948年アルヴァとともにイタリアを訪問するが、同年、病気が急激に悪化し1949年1月、自宅にて永眠した。



1898年、クオルタネで、測量技師の父ヨハン・ヘンリック・アアルトと母セルマ・ハクステットの間に生まれた。家系は代々林務官を務めていた。1903年、家族と共にユヴァスキュラに移り少年時代を過ごした。その後アラヤルヴィに移り住む。

1916年から1921年まで、ヘルシンキ工科大学においてアルマス・リンドグレンのもとで建築を学び、在学中には両親の家を設計している。その後スウェーデンに渡り、アルビート・ビヤルケの事務所で働く。

1923年、ユヴァスキュラに仕事を得たため戻り、建築設計事務所を開設。フィンランド建築家リストのトップに名前がくるようにAlvar Aalto (Aから始まる名前) としてとされる。1924年、建築家アイノ・マルシオと結婚。ハネムーンに出かけたイタリアで地中海文化に触れ、生涯にわたる影響を受ける。1927年、トゥルクの農業組合本部とヴィープリの図書館の建築設計競技で一等を獲得したことをきっかけに、設計事務所をトゥルクに移した。生涯、アアルトは200を超える建物を設計するが、妻であり建築家でもあったアイノ・アアルトと共にそのスタートの25年を過ごし、世界的建築家へと歩む基盤を作り上げた。初期の作品はユヴァスキュラ労働者クラブなどに代表される新古典主義に基づく作風であったが、同時期に設計されたトゥルン・サノマット新聞社から、モダニズムの作風へと転じた。国際的な建築家として知られる出世作となったのは1928年に行なわれたコンペで一等を獲得したパイミオのサナトリウムであった。また、同時期にCIAM(近代建築国際会議)の終身会員に選ばれ、ヴァルター・グロピウス、ル・コルビュジエらと交流を持ち世界的なネットワークを構築していく。

曲木の技術革新

トゥルク時代に、アアルトは革新的な発明家と呼ぶことができる何人かの人々とも交流している。彼らは多くの新しい革命的な解決と方法を開発した。アアルト夫妻は、オット・コルホネンと共に、木材を曲げる技術革新に取り組み、ラメラ曲木やL-レグを開発する。

パイミオの家具のデザイン、また1935年に竣工したヴィープリの図書館の天井に見られる波形にうねる曲線や木材の使用はアアルト独自の作風の一つとなる。

戦後

第二次世界大戦後、ニューヨーク万博で知己を得ていたアメリカ合衆国の建築家からの招きで1946年から1948年まで、マサチューセッツ工科大学客員教授を務め、MIT学生寮ベーカーハウスの設計を行った。1944年からはドイツ軍により破壊されたサンタクロースの町、ロヴァニエミの復興に都市計画段階から携わり、多目的ホール、図書館、市庁舎、教会、住宅の設計を手がけた。1949年、文教都市オタニエミ設計コンペティションに当選。都市設計の他オタニエミ工科大学のキャンパス計画と建物を手がける。

1949年、妻アイノが永眠。1952年、建築家エリッサ・マキニエミと再婚する。1963年から1968年までフィンランド・アカデミー会長を務めた。1976年、ヘルシンキにて没。没後の仕事は妻のエリッサに引き継がれた。